

Tsubaki Chinzan's Travels in Ashikaga: Reprint and Bibliography

Isao YAMADA

Tsubaki Chinzan (1801–1854) is known as a painter of Japanese Nanga school Painting (or Bunjinga, literati painting) in the Edo period. He learned painting from Kaneko Kinryō and Watanabe Kazan. He completed many scrolls of landscape painting, portraits, and birds and flowers. Especially the painting of birds and flowers is his strong point.

Chinzan traveled to Ashikaga in northern district of Kantō from 11th to 28th in August Tenpō 13(1842). He wrote a travel diaries with many sketches of ink and light colors. This book consists of three parts, diaries, copies of many paintings, and copies of copies by Yamamoto Kinkoku.

He visited Ashikaga Gakko, Bannaji temple, Gyōdōsan, and walked many places.

We can see his paintings and also those of his master and friends of the same generation in Edo from this book. We considerate several subjects of Japanese Nanga school Painting in later Edo period from this book as documents of painter and his age.

Keyword:

Japanese Nanga school Painting(Bunjinga, literati painting), Tsubaki Chinzan, Travels, Ashikaga

江戸時代後期の画家椿椿山（一八〇一～一八五四）の自筆稿本「足利遊記」（山形美術館蔵、長谷川コレクション）の翻刻と簡単な解題注記を掲載する。紀要執筆ページ数制限のため、ここでは個々の詳しい注釈、本書に見える著名な現存作品図版および美術史的な検討などは省略する。

本書は茶色の表紙左端に椿山自筆墨書きで「足利遊記 壬寅仲秋」とある。右上に「第世三」の墨書き貼紙、下に「全樂堂文庫」「椿山椿彌監藏圖書」朱文印がある。壬寅は天保十三年（一八四二）、日記本文にある通り八月十一日から二十八日までの十八日間である。その後に続けて書画鑑賞記録いわゆる縮図帳の形をとっている。これらも同年のものかどうかはわからない。日記挿図も縮図も時に淡彩で描くがいざれも草々たる略画である。版本と異なり外題内題はなく本文のみ袋綴九十五丁（内八十二丁オモテは白紙）で縦二〇・六×横十三・三cm。裏表紙に椿山以外の書で「道糺門三教鐘馗氏鬼神付」とあり、左下に所蔵印らしき方印がある。昭和初期の足利市個人蔵、その後本山豊実氏を経て長谷川吉郎氏の所蔵となり、渡辺華山（一七九三～一八四二）の溪澗野雉図とともに長谷川コレクションとして山形美術館に寄贈され現在に至っている。¹ それ以前の伝来については不明。

椿椿山は、槍組同心として幕府に仕え、武士の様々な心得のほか煎茶にも詳しく、金子金陵および渡辺華山に絵を学び、山水花鳥肖像画のいざれをも描いた。それぞれに秀作があるが特に花鳥画に自己の本領を見出し、惣南田ほか中国絵画の学習により色彩と水墨技法の習熟に努めた。私見では天保八年（一八三七）頃から嘉永五年（一八五二）頃までの約十五年間が画業のピークと思われる。惣社の獄における華山救援に仲間とともに尽力しその経過をまとめた「麹町一件日録」はよく知られる。天保十三年秋八月は、前年十月の華山死去の一周年目前であり、椿山自身不惑を過ぎてやや晩年に近づく時期である。椿山の日記縮図類は華山に比べて公刊されたものが少ない。脇本樂之軒は自ら所蔵する「丁亥日録」（文政十年、一八二七）と「琢華堂戊子日録」（同十一年）を取り上げ、特に前者が「椿椿山山海日録」の五月一日から閏

六月二十四日の記事に続く七月十七日から十一月十八日のものである」とを述べその内容を概略紹介された。² 近年では椿山の過眼録縮図冊等は文政二年（一八一九）から嘉永六年（一八五三）までほぼ全年代に渡つており、文化十三年（一八一六）から数えれば約五十冊の現存が確認されている。³ これらのうち公刊されたものは右に挙げた「山海日録」や「麹町一件日録」である。⁴ この「足利遊記」は中に華山の溪澗野雉図のあることで知られ、それもあつてそれらはセットで伝えし、これまで何度も度々が展覧会に出品されてきた。本文内容は全体にメモ書き風で感想やそれに基づく考えをほとんど書き記していない。何度も寓目した華山作品を写しているが、それらについての個人的記述も無い。本日記は歴史的にあるいは美術史的に特に重要なものを含むとは言えないが、逐一内容を追えばまことに興味深い所が多い。彼の日記類がほとんど公刊されていない現状では、全体を翻刻することにも意義がある。筆者にとって難解な箇所はかつて本書を読まれた武田喜八郎氏の「教示」を得た。改めてここに感謝申し上げたい。また山形美術館学芸員月本寿彦氏に格別のご配慮ご協力をいただいた。本文は日付ごとに段落を変え見やすくし、異体文字はなるべく活字体とし、句読点を適宜補い、誤字はママと傍らに注記。まだ疑問点や不明箇所を残すが、大方のご叱正をお願いしたい。

この日記を取り上げているわけではないが、この八月の旅に早く言及されたのは金関丈夫氏である。自ら入手された福田半香宛の椿山書簡の翻刻とその内容を詳しく検討されている。⁵ それによれば当書簡は天保十三年小春十五日、すなわち華山死去の十月十一日一周忌の四日後に執筆されたものと考証されている。華山肖像画制作での苦労、華山筆竹村海蔵像のこと、椿山の旅に同行した山本栄谷や見送りに来た小田蒲川などについて記述されているが、この旅に言及された書簡原文は以下の部分である。「八月上旬野州辺へ遊行仕候、十二日之間滞留致候、退屈仕候、上下雨天、船中殊に難儀」。「上旬」は、実際には十一日から二十八日までだから正しくはない。「十二日間」は、足利滞在が十三日到着から二十七日出発までだから両日を除けばほぼ正確。「上下雨天」は、十三日の明け方と十九日の明け方を

除けば晴天に恵まれており事実に反する。帰路は二十六日と二十八日に雨となり、その印象が強かったのだろうか。金関氏は、旅の往復ともに船を利用したように解釈されているが、日記本文の通り往路は中山道経由、復路が船である。また椿山は地方回りのいわゆる出稼ぎとしての遊歴画会をしなかつたと言われるため、この旅の目的が何であったか不明とされた。これについては日記本文を逐一読んでも椿山は何も書いていない。そのヒントは「琢華堂門籍」中にある。この椿山の門人帳は文政七年（一八一四）から嘉永六年（一八五三）に至る計三七三名が列挙されており、関東甲信越を中心に北は仙台西は尾張美濃に及んでいる。筆者の関心からは興味深い人物が何人か登場するが、それについてはここでは触れない。本日記に関連するものとして、天保十一年九月六日に「野州足利須永保藏、蒲川の紹介」とあり、同年四月十八日には「足利大日大門通り内田政兵衛」とある。この須永が日記に頻繁に登場するその人と断定はできないが、そうでなくともそれに近い一族であろう。内田は椿山が足利到着後すぐに手紙を届けさせた当人ではなかろうか。そしてまさにこの天保十三年八月二十三日に「寒泉中嶋忠四郎」と「慶之市川善三郎」の二人が入門している。つまりこれらの人々による足利招待に応ずるのが旅の目的だったと考えられる。そこには華山の死去、以下に触れる天保改革による世相からの気分「新」も加わったであろう。

もう一つ金関氏紹介書簡で興味深いのは「此節は都下却而風流と申候由、絵事盛に御座候（中略）二両年も立候は、都下様子も定り可申」の部分である。金関氏の文をそのまま引けば、前年の水野忠邦による天保改革により「あらゆる奢侈が禁ぜられ江戸の町は火の消えたようになつた。それに対して風流事の方は却つて盛んになつた、といつのである。（中略）この年の九月、水野は既に罷免されており、椿山の「二年も立たば、都下の様子も安定しましょ」という楽観的な見通しもなり立つたわけである。」となるが、こうした状況を分析したものに前田愛氏の論文がある。⁷ 戯作者への厳罰その他の問題が論じられているが、そこからは取り締まりの対象となつた出版界と草稿の世界の相違（ただし華山の場合は、あらかじめ個人攻撃が

前提にあつた上で強制捜査による草稿押収が逮捕に直接つながつてゐる所が異例のケース）、社会批判的なものと文人風流の世界との相違が鮮明に浮かび上がる。

その問題にはここでは触れずに、ともかく距離的にも期間的にも短いこの小旅行の概要と本書の全体構成を以下に述べよう。本書には見返し部分に往路の各駅間の距離や関連人物名などが細字で記されている。八月十一日早朝江戸出発、山本栗谷と従僕が同行し、小田蒲川が見送りとして蕨駅まで同道した（栗谷は津和野藩の吉田氏出身で山本氏に養われる。多胡逸齋および華山に学ぶ。この当時は江戸遊学中のような身分だった。蒲川は江戸の人で華山に学んだ）。途中朝顔の枝を折り巣鴨の庚申塚茶店まで携えそこで写生した。板橋志村、戸田川の渡し、蕨を経て浦和に至り吉田氏宅に宿泊。十二日、大宮氷川神社参詣、上尾、桶川を経て行田に宿泊。十三日、酒巻の渡しから上州に入り、狸塚（むじなづか）道（現在の道路では足利邑楽行田線にほぼ該当するか）を進み、県（あがた）村から足利遠望、町に着き角屋清兵衛方に宿泊、以後ほとんど行動を共にする須永仁懐、照華、蕉雨らに会う。十四日、須永氏宅ほか訪問、華山杏所合作の扇面、高久靄崖や池大雅の作品を見る、鎌阿寺参詣。十五日、足利の友人たちと酒席、華山作品ほかを見る、夜に渡良瀬川の川原で名月觀賞。十六日、須永氏宅で肖像画制作。十七日、四愛図制作、念佛講の集会がありその料理を食べる。十八日、足利学校訪問、建物と漢籍数種ほかを見る。十九日、蕉雨藏奚岡筆山水図ほかを見る。二十日、照華の子が急病死する。二十一日、帰りの船の行程段取りを確認、中嶋寒泉藏の作品を見る。二十二日、計七人で足利郊外の行道山淨因寺訪問（北斎の天保五年頃の「諸国名橋奇覧」中の「足利行道山くものかけはし」でよく知られる）、途中中嶋寒泉宅（巖華園）に寄り庭園を眺めて休憩、淨因寺清心亭では酒席を設け、文人の風流を楽しみ景観スケッチもする、夕暮れに帰宅。二十三日、墨蘭譜制作。二十四日、友人たちと歓談。二十五日、華山の妹で桐生の岩本茂兵衛に嫁した茂登の長男喜太郎に会う、友人たちに旅の記念の作品制作、夜船で足利発。二十六日、栗橋で

宿泊。二十七日、関宿、流山を経て鴻之台に宿泊。二十八日、行徳、鎧の渡し（広重の「名所江戸百景」中に「鎧の渡し」がある）を経て帰宅。その後に備忘録風に特に足利関係の多くの人名住所が列挙されている。次に復路の風景スケッチ三図があり、五十三丁オモテ右上隅に「以下栢谷縮図摹」とある。このページの人物縮図の線が右側ページまで引かれており、紙質も全く同じことから日記と縮図は一体のものと考えられる。ただし「以下」が巻末（九十五丁オモテ）までなか途中までなかは明確ではない。華山の渓澗野雉図縮図もここにあり一切記述は無い。ついでに言えば、八十五丁オモテから大きな虫損が見られる。

次にこの日記内容からいくつか簡単な注記をしておきたい。同時代の文献では渡辺華山の『毛武游記⁸』と村尾嘉陵の『江戸近郊道しるべ』が今のところ最も興味深いが、それらの記事にも触れておきたい。華山の場合は中山道熊谷経由で桐生に向かつており、帰路は本来の目的である三ヶ尻を経て江戸に帰っている。足利訪問は天保二年十月二十一日から二十三日までの三日間である。その折担角清風楼に寄つてゐるが、これが椿山日記にある擔角樓だろうか。さて足利学校関係では、華山が閲覧した宋板左伝註疏、周易註疏、文選を椿山も見ており、その他に宋板周礼を見ている。これは閲覧者が希望図書を申請するというより来訪者向けに漢籍の代表的なものを事前に選定しているようと思われる。椿山の書写には年号ほか欠字がある。また鎧阿寺境内の大黒堂は、足利義兼創建と伝える校倉形式の宝庫で宝暦二年の棟札がある。村尾嘉陵（一七六〇～一八四二）の『中山道大宮紀行¹⁰』は、文政二年十月四日、午前四時半から午後八時に至る、江戸から桶川付近までの日帰り散策で、上州秩父の山々の眺望が目的、その中で大宮氷川神社の記事が詳しく、また上尾や浦和などでの芋櫃あるいは芋蔵についての記事は、椿山の薩摩芋スケッチの背景として興味深い。作品では十七日記事 終日無客四愛図発稿成の現存作品が栃木県立博物館蔵で、款記に「壬寅仲秋写於足利客舍并錄馬祖常四愛詩填白 椿山外史椿弼」とある。草稿は足利で完

成は江戸か。六十四丁オモテの縮図は、現在ニューヨークのメトロポリタン美術館蔵東坡笠屐図¹¹だが、残念ながら椿山は画賛を写していない。六十七丁オモテの三人の禪僧贊の記事は永和三年（三七七）大拙祖能贊の建長寺蔵円鑑図との関連からも興味深い¹²。

註

- 1 山形美術館所蔵品図録参照、また最近のものは次の文献参照。長谷川吉茂「長谷川歴代とコレクション」「再発見日本の書画の美—暮らしに息づく山形長谷川コレクション」展カタログ所収 神戸新聞社 一〇二年
- 2 脇本樂之軒「椿山の日記」同『日本美術隨想』所収 新潮社 一九六六年
- 3 「江戸後期の新たな試み」展カタログ 田原市博物館 一〇三年
- 4 「椿椿山山海日録」校刊美術史料続篇所収 同刊行会 一九八五年、「越町一件日録」
- 5 金闇丈夫「福田半香あての椿椿山の書簡」九州文学第三卷 一九五七年、同『文芸博誌』所収 法政大学出版局 一九七八年。増山禎之「椿椿山考」「椿椿山展」カタログ 所収 田原町博物館 一九九四年
- 6 「琢華堂門籍」複製本および翻刻 崇山会 一九九〇年
- 7 前田愛「天保改革における作者と書肆」近世国文学ノ研究と資料所収 一九六〇年、「近代読者の成立」有精堂出版所収 一九七三年、著作集第二卷 筑摩書房 一九八九年および同時代ライブラリー 岩波書店 一九九三年に所収
- 8 「毛武游記」「渡辺華山集」第一巻所収 日本書センター 一九九九年
- 9 「足利学校貴重特別書目解題」足利学校遺蹟図書館 一九三七年
- 10 朝倉治彦編註「江戸近郊道しるべ」平凡社東洋文庫四四八所収 一九八五年
- 11 「禅林画贊」第62図「東坡笠屐図」島尾新氏解説 每日新聞社 一九八七年
- 12 本稿に関連する拙論は以下の通り。「渡辺華山の毛武旅行」「利根川流域の自然と文化」所収 関東地区博物館協会 一九八三年「椿椿山筆歳寒三友図屏風—嘉永年間の作品発掘古美術77号 一九八六年、「島霞谷資料」群馬県立歴史博物館研究紀要14号 一九九三年、「逸人と労人—椿山論の一、三の觀点」「椿椿山展」カタログ所収 田原町博物館 一九九四年、「渡辺華山の山水觀」東北芸術工科大学紀要18・19合併号 一〇二年

〈本文〉

（見返し）落合より大宮迄廿丁、大宮上尾へ三里、上尾桶川三十町、桶川鴻巣二里半、鴻巣行田三里、行田足利七里、斎上酒巻、戯以指頭写之。歳避鬼驅疫也、足利生川村野猿田、天外周碩同祐、老人生川村土屋太左衛門、桐生下山佐助、須永氏六畠之間床七尺、九州肥後天草小島三郎殿号天草、豊島香雨田村村、須永竹淡、立平、里光、「全樂堂文庫」（朱文印）

壬寅八月十一日丙亥晴卯刻東方明るを待つて発、栢谷僕勇隨、蒲川行を送。新坂の上なる明屋敷乃垣に朝顔の花美しく咲ければ手折て庚申塚の茶店まで携写生。あるしなきあれし垣根を朝顔のさかりながらに花と咲ける。巣鴨庚申塚茶店に休ぶ。（「戸田川渡し図」）板橋の駅を過て志村の原に至、原の入口に四五軒茶店あり。皆井乃水あふれ出て流て池に入、自から寒からしむ。此辺より戸田川まで半道程もありと云。辰の刻過し頃戸田川に渡りて向いなる榎屋と云茶店に休ぶ。是より蕨の駅迄十八丁と云。十

とせ斗り過し頃志村の原を通りたるが悉く尾花野にて荒れたる氣色なりしか、いつしか処々田畠開け耕作する人々多かり。蕨駅に至る、駅の入口より左の方秩父山見ゆる。又富士見と云る茶店あり。晴る日ハ富嶽見ゆるとなん。此駅の入口にて蒲川子ニ別る。是より一里十町も過て浦和宿ニ至。宿の家はづれ（「榎屋より戸田川を望図」）（「秩父山、蕨宿入は俄に雨降り来

ければ、けふはまたぬるもうれし秋の雨」）（「足立郡下落合　吉田氏薩磨芋」）にうんとん屋あり。其側に左へ細き径を行。又二筋の道を得ル。左へ行事十町斗にして松原あり。原の中を七八町も過て平田を見る。屈曲して行事四五町余小き破れたる寺あり。その門を入、裏へぬけ出て左の方江暫く行、吉田氏の家に至、牛の刻半。（「下落合村吉田氏」）

十二日丁子晴朝五ツ時吉田氏の家を発ス。（「享保七天二月吉祥日、同郡

氏子中、施主、足立郡高鼻郷大沼、願主阿闍利宥寛、武藏国二宮氷川大明神本地正觀音佐々木文山書」）、是より宮まで十八町、裏大門すく道有。一宮大宮駅頭ニあり。神主角井出雲守、角井駿河守、本地觀音寺、岩井伊予守、御朱印三百石、是より興次郎從て出馬堺疋、上尾宿迄荷物を運、馬をかへす。夫よりノ宮へ参詣、此宮大門十八町あり。社頭も美麗なり。社の裏

をぬけて大宮宿の頭ニ出ル。此駅より上尾江（「二宮額扇面」）まで三里過て桶川へ三十町。夫より鴻巣駅迄二里半。此駅家々甚美。是より駕を命、三里にシテ忍城下行田駅ニ至。此駅松平下總守殿領分なり。二宮境内の茶店にあり。此羊柳川侯より納らると云、側紙を売、人々買て食せしむ。（「二宮本社」）上尾駅頭にて羽ぬけ鶏を見。思ひあたりし事ありてうつす。宋元人竹鶏図多ク其趣ヲ写。（「桶川より鴻巣に至る往来にあり。」）鴻巣駅頭より一里二丁過て左江行田道曲り角ニ高き堂あり。内に石の地蔵尊を安す。田畠に白蓼花多し。七ツ半過る頃行田駅ぬの屋幸蔵方へ宿。

十三日戊丑明ケ六頃雨天六ツ過より晴。行田駅を發。斎上酒巻江至り渡船あり。此頃大ニ雨ふり出、船を渡、向ひなる茶店ニ休ぶ。是所より馬壹疋雇て荷物を附、行事一里半斗ニ而狸塚道ニ至る、松山あり。（「行田駅より斎上江至る道、和田村」）（「酒巻渡」）山を越れハ大なる原ニ至。尾花咲乱れ女郎花荻の類千々の草花おひたたしく細き道へ左右よりおしかかりて千草の露に袂をうるをす。（「上州邑樂郡県村より野州足利眺望」）行田より酒巻渡まで一里余、渡しより足利まで五里半と云。渡来川渡りて足利駅角屋清兵衛江止宿、号檐角楼、此日照華上州桐生ニ至、日暮て来、懷仁内田江書を發、懷仁も夜に至りて来、内田ハ明日來へき由を答、酒肴を設、九ツ時ころ皆々家ニ帰。

十四日己寅晴、勇助六ツ半頃発、興二郎も同刻行道山へ登り、四ツ半頃帰、即刻足利を發。栢谷と同く照華仁懷蕉雨之家に至、各在宿ニ而夜に至て客舎へ帰、即蕉雨客舎江来、夜九ツ時頃まで嘶。照華藏、対聯、紙本墨画、己亥四月二十有六日（「書、華山外史、照華藏絹本、照華二階の小襖、杏所叟写知見時己亥上己後一日、華山外史作松、長安三月酒詩場醉妓騙僧極狡狂誰写扇頭真卒会初知筆墨有幽香、此蒸会者為黙庵荊石魯庵逸菴照華清香蘭陵寒泉如庵茶園雲台皆足利人也生業之余寄興筆墨能四声利奔驚忘可嘉尚也、戊戌十一月朔十日華山外史、丁酉秋八月廿有九日燈下拈筆為翠厓詞史属疎林外史、同藏便面、沈大池有此図費漢源亦有雁從何人來不可知予仿費氏濃墨作遊蓋不雅中雅、登、同藏便面、同藏全唐紙一枚是ハ江戸にて買たるよし、所謂仕込画なるべし、○湖石牡丹図没骨○湖石秋葵雁來

紅団没骨、春、蘿如金香満室也。邨戯墨、秋、己卯夏日偶戯写於春草堂。逸軒、大日堂へ参詣、鑊阿寺本堂の額字、本堂右ノ方ニ懸有之、無眼流劍術、文化五年四月吉日、元祖三浦源右衛門平政為、当国足利住新井鬼藏藤原茂公、大日境内ニアリ、大黒堂凡二間半四方モ有ハシ、七社堂境内ニアリ、額字足利大權現十五代像、此堂中左右ニ足利十五代の木像ヲ安置、長サ一尺五寸斗、「須永仁懷の居宅」、須永藏武林五老井許六画、柄木木綿、足利より東へ七里あり、一反壱貫九百文位、此木綿地密ニして花美、横糸を焚て用と云。大日堂山門之図、額字今剛山。

十五日庚卯晴、此程客舍主人の忤病氣ニテ岡平(根本山ヘノ道)瀧の川ヘ至り水浴せしニ、昨日養生も不叶病没のよし告來り、仁懷照華來、表具師金兵衛足利阪ノ下、蘭斎常州ノ人、當時遊曆ノ由、名靖共大日ノ向ニ偶居、と同く酒肴携來、蘭斎云下總佐原ニ吉益ノ養子琴夫栞と云人あり。傷寒論ニ秀高名なりと云。僧稼亭來、足利在山下と云所ニ住、狸塚雨中景枚画て贈。清松悴中嶋寒泉名冽字正養忠四郎月谷村、市川善三郎号慶之田嶋村、各酒肴携來。倚石疎花瘦帶風細葉長靈均清夢遠遺佩滿濃湘、茶團詞宗能詩解画、足利雅傑也、適來索画、予画唯從胸臆不海繩墨漫然揮灑応之、所謂般門弄斧之識、豈能免哉、時丁酉冬十一月二十六日登敬書、辻納涼、俳諧のすりもの蘭斎ニテ見る。凌宵已展疎々葉護粉聊嘗煩々籬、華山外史、独座結佩思公子燐系明江怨美人、戊戌甫月写為蕉雨雅兄登、かさりや庄左衛門角清ノ向ノ人來面会、石川新兵衛松田住是より一リ半方江栞谷至肖像ヲ認、此人八十三歳と云。照華仁懷同道ニ而渡瀧江至名月を觀。

十六日辛辰晴、須永江至、嵐斎翁肖像を認、夜ニ至て帰、栞谷帰宅、夜照華仁懷來、此夜竹溪如水ノ二号ヲ改。昨夜館林医生真嶋元貞と云人渡瀧ノ遊行の跡へ來り所々尋候由。經師屋繁松号雪蕉足利町ニ住、須永三而面快、講を催、五十人斗雜客來、夜半ニ帰、為に赤飯をもふけ大平ニ盛、煮染一皿添て持來、赤飯乃こはき事限りなし、此日桐生の市のよし、照華へ沙の羽織地を頼、着分価一分朱ト式百文也。

十八日己午曇小雨、市川善三郎より味噌漬茄子瓜二重到来、塩辛事限り

なし、照華按内にて学校江至聖廟を拝、此寺代官(「□付、台引大皿、結あけいんきんかんひやうしひ草、ごほう長芋はす、猪口こんやくにんしん白あへ、吸物松茸菜やきぶ、大皿來青よせ物なし、酢物すいきすあへせふが、香物大根皿なし、壺淡雪豆腐あんかけ、汁焼とふふ冬瓜、飯、結ひあぶらけ、」)幾二郎と云物聖堂文庫之案内を致、聖廟表門之額学校之二大字明人書と云伝ふ、内の額入徳之二大字従后之宮御筆、堂正面聖像左小野篁像右神大祖小像を安置、周易正義、上杉右京亮藤原憲忠寄進(花押)、端平二年正月十日、鏡陽嗣隱陸子遭遵先君子標以朱点伝之時大雪始晴謹記、文選(「足利学校」印の写)、学校寄進、平氏政朝臣、司業九華叟(花押)、予老衰之故欲赴郷梓及相州之時、抑留被帰于杏壇次有寄進也、加朱墨点三要、左伝註疏(「金沢文庫」印の写)、上杉安房守藤原憲実寄進(花押)、宋板周礼、小本二冊箱入、足利庄学校之常住、文安六年己巳六月晦洛陽僧砭愚置之、○瑪璃琴台、心越禪師持來之物、夜須永同道照華へ至、麦飯馳走、四ツ時客舍ニ帰。

十九日甲未、明方より大雨四ツ半時より快晴、須永照華蕉雨來小酌、蕉雨藏笑岡山水幅展觀、寒泉襖四枚表菊認、稼亭來。

二十日乙申晴、照華小兒靈前へ菓子一袋遣、照華縁者元町堀江源十郎同道照華須永來、須永酒肴を設、蕉雨藏紙本立五尺余巾二尺、廿一日丙酉晴、照華小兒靈前へ菓子一袋遣、照華縁者元町堀江源十郎同道二而来、秋七草二幘を乞、須永來、足利市日、五九ノ日、右翌日六十ノ日野猿田より出船當朝明ケ六ツ時出船ニ而関宿江着岸足利より関宿まで道のり十二里と云、関宿船宿野村勘兵衛と云が足利の定宿と云、其夜出船ニ而翌日江戸江着岸、船の内セイヂと云家根畠あり此處へ早く乗りたるよしと云、寒泉屏風のうちニ有之、(画中に)湘江遺怨、杏所外史筆、寒泉床脇の襖、寒泉藏絹本、標率雲一色恰見溪山色幽意日蕭々溪山不必即、菱湖巻大任、三清共一蠶意態各蕭閑不用回名姓望知老華山、星巖詩墨、唐子西古硯銘、龍集己亥春三月穀雨後三日菱湖巻大任書于江都鳥銃坊蕭遠堂南窓是日也炎風煤古人故詔一乖自不得工也、後之觀者宜恕誌、寒泉藏絹、廿二日丁戌晴、照華竹溪須永栞谷と同、行道山江至、僕里平江茶具籃を

持セ、岩花寒泉宅江立寄仮山を見て暫休足、寒泉庭中ハ自然之山腰をきり開き仮山となす、奇観なり、山上絶壁之上より瀑布落る事數十尺、主人瀑布ノ下之大石江題字を乞、仍而百丈瀉寒泉の四大字を題せり、是より小島三郎、九州肥後天草ノ人号ハ天草、當時此地ニ遊曆之由、市川善三郎兩人連立て合テ七人同行して行道山江登る、山上清心亭ニ宴席を設け携たる酒茶をとり出し、追而豊島元達号香雨來り、又大二酌、各書画作文詠詩以て大二樂、行道山住僧江、八十余ノ人、面会、亦此亭ニ來り真景を写、暮昏山を下、岩花寒泉之宅江栢谷ハ止宿、照華竹溪里平と同く、「岩花より行道山を望」、行道山上清心亭題壁、松風吹石壁四面涌雲涛坐撫万山頂方知着処高、乙未八月朔拉諸君遊于此題絶句星巖梁津、天保四年癸巳四月廿四日与黙庵東嶠梅原魯庵洞水如庵雉留逸庵秋桂揖斎内遊醉中写之、詩仏老人大尋時年六十有七、惟亭追到重開醉到黄昏又作、天保辛丑夏五望後一日京常藤森大雅同盟城室武来宿於此是日小雨屢至古木怪巖出没於飛雲惟中真奇觀也、寓舍へ帰る。

廿三日戊亥晴、月谷堀江弥一郎來、十八九才ノ人、小島三郎來、夜照華來止宿、此夜秉燭墨蘭譜十二幀為慶之之写。

廿四日己子晴、慶之來、広沢海芳恵照華寒泉須永繁松來、夜中帰、栢谷をして学校真景を図せしむ。

廿五日庚丑晴、綠草成烟一經幽芳園暖影罷春遊海裳似錦栖双鳥偏染紅霞白了頭、撫雲溪外史筆意耕畚呂元写、照華藏、桐生岩本茂兵衛より手代來、帶地到来、即喜太郎江戸より帰りかけの由、立寄小酌、船宿三軒江文通致し吳、贈別として照華須永寒泉慶之、慶之云蘭状之内着色念ノ入タルヲ一枚跡より贈り吳候様申聞、森嶋玄貞來館林ノ人鶴湖ト号、豊嶋玄達、黒沢忠達壺井真道門人、當時遊歴ノ由上杉藩人、織道具や宇兵衛足利丁、伴連れ來、照華道同して夜九ツ時頃足利を発、野猿田河岸早川倭助方江至、各宿。

廿六日辛寅雨、朝六ツ時過舟を発、舟賃式人二而三朱釣り六十四文返ル、主人云雨懸之料式百文也と云々、乗合十四五人、船暮六ツ時栗橋三至、夜中ハ舟行禁制なるよしにて此駅に宿、会津屋といふ家に宿、此日雨盛に降、船の者各同宿、都合十六人。

廿七日壬卯晴、朝六ツ半時発、旅籠百八十文ツツ、「関宿野村勘兵衛より望」、関宿御番所手前より上陸、此番所久世大和守領分、直ニ行こと三町はかりニして野村勘兵衛といふ宿三至、岩本よりの書状さし出、此處にて乗合の人野村へ止宿、今晚の一はん船ニ乗候由、外七人亦早川の船へ乗る、此乗合の中桐生下山と云絹屋あり、岩本懇意の人也と云、黄昏流山辺を通て鴻之台の辺三船を泊。

廿八日乙辰晴、此日夜明ケ之頃雨降り又晴、終日陰晴互ニして南風殊更ニ強し、晚舟を発、六ツ半時頃中川御番所前を船行、五ツ時頃蛤豆腐売家ニ至、ここハ行徳といふ所也、夫よりは替舟を買、老人五十文ツツ、四ツ時頃鎧の渡江着岸、九ツ時前家に帰る。

清松悴、中島忠四郎岩花月谷村名冽字正養号寒泉、稼亭足利ノ在山下ト云所ニ住、蘭斎常州ノ人名靖共大日ノ辺ニ偶居、表具屋繁松号雪蕉、堀江源十郎元町照華縁者也、市川善三郎田島村号慶之、表具屋金兵衛足利坂ノ下住、石川新兵衛松田ノ住栢谷像ヲ作ル、真嶋元貞館林眼療医、小島三郎肥後天草ノ人号天草、豊嶋元達岩花ノ人号香雨、當時足利偶居黒澤忠達壺井真道門人、天外周碩足利生川村野猿田ノ向フ也同船ニテ面会、下山佐助桐生ノ絹屋是モ同船ニテ面会、紀要土屋太佐衛門足利生川村ノ百姓同船ニテ面会、堀江弥一郎月谷住十八九才ノ人、宇兵衛織道具屋足利ノ人、

壬戌陽月十日蓀谷老納文石写(樹木図)、縹幅縱四尺五寸許横一尺七寸許、雲烟(鶴図)、縹、雲烟(周之冕、花鳥図)、小方縹鈎勒明画、雲烟(草花図)、江香嶋笠(牡丹図)、(人物図)、山田氏藏絹本(狩野常信、馬図)、(狩野周信、波に燕図)、一今晚客御座候ニ付其方之御内はせ川殿と申女郎衆雇申候、此客右より被仰付候御法度之衆ニ而ハ無御座候、如何ニモ慥成人ニ而御座候、若横合より御法度之客仕候と申者御さ候ハ何方迄も我等罷出申分可仕候、為後日仍而如件、亥ノ七月八日、宿月行持六兵衛、屋とぬし長右衛門、庄左衛門まいる、揚屋差紙、山田氏藏、同文言別ニ壹枚有之、略之、享保十己巳歳のよし、奥羽之境至二月始見水仙開、宗任に水仙見せよ神無月、夜半翁、山田氏藏(水仙図)、芭蕉若書と云、晚成堂、はるやこし年や行けむ

酒先将味冽傾砌裁单弁兼千葉豐泛三花又五英閔尽人間閑日月秋風籬畔
伴淵明 緯楨、右仁齋先生書、橫幅、晚成堂^二見る、金粟箋、縞袂相逢半是
僂、願元圻(竹梅図)、梅裏、數日前遣使下略、臨君謨帖、仲山、秋海棠裏、散
帶高歌云々下略、陸圓沙句同甫辰、摹陸齋平筆意、願元圻(秋海棠図)、九
畹清芬摹陳所南午侯坼(蘭図)、觀去懸針垂露之下略、南湖、撫趙子固本、
午侯、藤、遜園居士言下略同甫□能(草花図)、広陵佳種己亥五月願元圻摹
白雲外史(草花図)、芍藥、夫顯揚正教下略仲山彭翊紫蓬山人全怯相国寺
竹香和尚、蟬閣龍惺建仁寺九淵和尚、葵齋野艸龍建仁寺瑞岩和尚、漁庵南
江叟南江宗沅居士、古筠寒衲妙心寺古筠和尚(蘇東坡図)、郤齋春樹暮雲
時千里金蘭有所思為作画図芋遠寄看來如誦采蕭詩、遜齋(山水図)、白雲
無數擁青螺倒指星霜兩載□不是相尋洋未識溪山綠樹別未多、江陰鶴軒何
澄遂賦鄙句写寄伯声良友以寓別情意、上總右富田村善兵衛藏、号東園(竹
図)、絹横物、蒲川所示伝来林良(蓮図)、文字亦釣說泰鶴、松下拾栗図柳先
生需、草暈前、四明白洋逸史吳湘製、磨而不磷、余任筆作字輒取論語非必
好書欲以熟其語焉耳、太宰純書、栄元兄藏、三尺七寸壹尺七寸、湘江月夜
乙巳長夏日竹庵山人戲筆於客枕齋中(竹に岩図)、覺寺比丘宗英得此鏡於
宗國持帰経三年後、大覺寿福経以鏡送獻之、経一句余忽然鏡面垢生、其
後重現大士慈容、法光寺□□之收藏、礼事之三年後、因造本尊觀音像、仍
藏腹中、今絵此像求頌、一寧漫為述偈言、嘉元乙巳清明節、一山比丘一寧書、
育王月江正印謹贊、子元祖元謹贊(円鑑図)、二月廿六日展觀(弁才天図)、
絹本顏秋月図探幽摸本(人物図)、主人○布袋探幽、寒山拾得尚信、山水二
探幽、靄厓○費晴湖書、普賢像秋月、書陶齋、南岳藏○弁天探幽、蝶浪燕、
雲錦○祐晴写元信天神、豊田藏○富士横物、(富士図)、行年七十三歳雪舟
(菊図)、海保氏藏、行年七十三歳雪舟(菊図)、友松図之(菊図)、友雪紙本
晚成堂(虎図)、(竹図)、紙本管洞齋藏(葡萄図)、(花鳥図)、(花鳥図部分)、
烏台水月、会稽巢雲劉炤(鳥図部分)、紺紙金泥画艸虫所々石貝ヲ用(草虫
図)、(草虫図)、土佐家所藏甲建(甲建図)、樹頭樹底覗殘紅一片西來一片東
自去桃花貪結子錯教人恨五更風、治亭師鉄保立四尺五寸巾二尺蠟箋、晚
成堂^二見る、壬申夏日写上扶翁老先生董柴初(以上画中)晚成堂絹本摹本

あり、立五尺計横一尺五寸(山水図)、將軍溢価買吳釣要与中源寄□讐試桂
窓前驚電軒略拋床下怕泉流愛天露拔雲虛位悉地潛□究魅愁見健夜深星
斗畝等間期尅身支頭、戊戌端午錄奉贈朱尊翁大節鎮、紫山農淡承畯書、越
後ノ人所藏巨幅淡雅慎書あり、○南田孫女惲水と云者之画幅あり、水府
水仙梅山茶石竹山茶対幅(花鳥図)、(花鳥図)、(花鳥図)、伝来仲華光(梅
図)、玉豌子筆法眼誌之(蘭図)、遁山葡萄譜一冊、嘉靖癸丑歲六月阮望文安
高松書字守之号南崖又号我山(鶴図)、(鶴図)、古河道中懷旧、松林行尽又
松林風渡成文治世音人執元和寛永政森々遺樹自清陰、右楠鷲峯先生詩、
在文集(鶴頭部)、仁智殿直錦衣鎮撫五羊何浩写(松図)、(松鷹図)、(不明)、
(芦雁図)

以下栢谷縮図摹、(人物図)、(見開きで故事人物図)、凌宵柱石縹立五尺位横
三尺(草花図)、嘉靖癸丑夏四月写于書帶草堂吏部考功郎王穀祥(草花図)、
(花鳥図)、(蟹図)、(見開きで蟹図)、上総三枝十右衛門收藏絹幅、(見開
き)、土佐光信之(見開き)、(見開きで故事人物図)、悠見寒梅樹開花漠水
浜不知春色早疑是弄玉人、味苦能誰愛幽香只自珍長持潭□破普□世間
人、亭在何須更而床馳把抱石自相當酒未塩汁車地引且疑初平章作羊、(見
開き)、(四君子図)、(見開き)、(見開きで華山溪澗野雉図縮図)、視平準、視平ト云フハ
天地ノ極ヲ立ル事ニテ己力目力ノ上下左右ノ中ヲ立ル、コレ写真ノ準也(海
景図)、宜山無人水流花開(以上、画中)、(蘭石図)、(見開きで蘭竹山水図)、
(岩図)、(山水図)、(鶴図)、秀色可憐刀切玉清□不断□烹龍(筍図)

[執筆者]
山田烈

Iso YAMADA

芸術学部 美術史・文化財保存修復学科

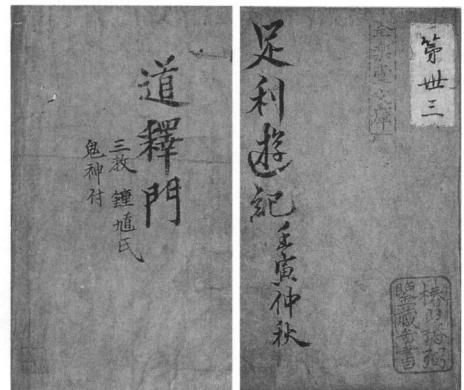
Department of Art History and Conservation, School of Art

非常勤講師

Part-time Lecturer



見返し・1才



表紙・裏表紙(山形美術館蔵)



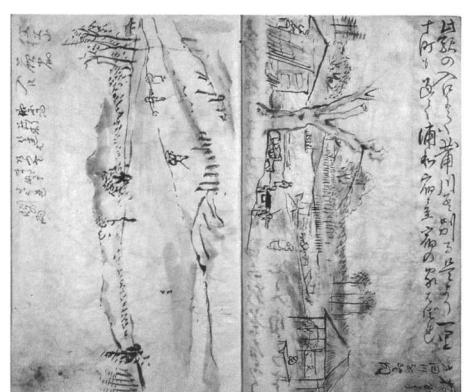
2ウ3才



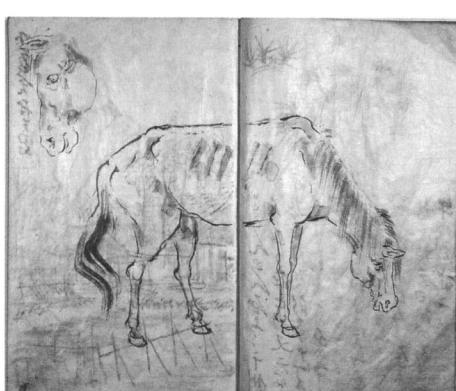
1ウ2才



4ウ5才



3ウ4才



6ウ7才



5ウ6才

第三
幕

足利
逃
紀
壬
寅
仲
秋



8匁9才



7匁8才



10匁11才



9匁10才



12匁13才



11匁12才



14匁15才



13匁14才



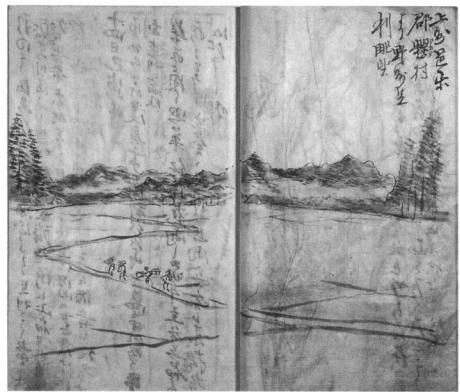
16才



15才



19才



18才



21才



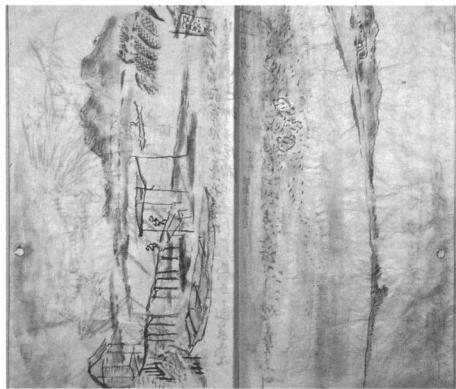
20才



23才



22才



24才25才



23才24才



26才27才



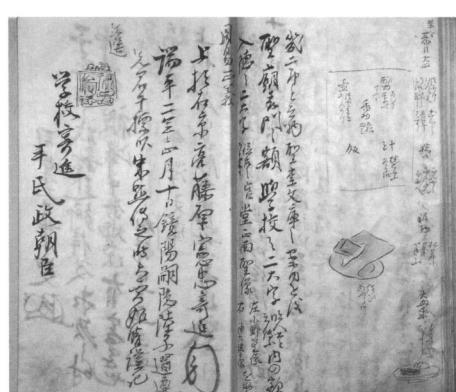
25才26才



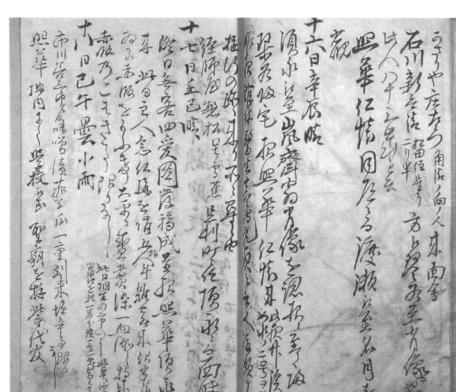
28才29才



27才28才



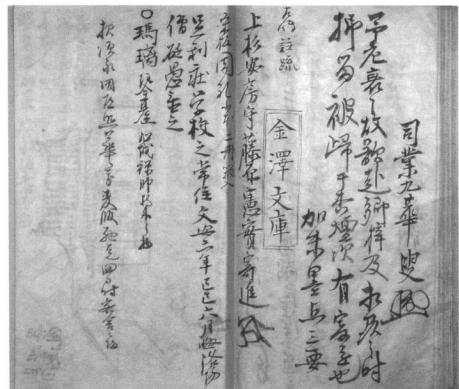
30才31才



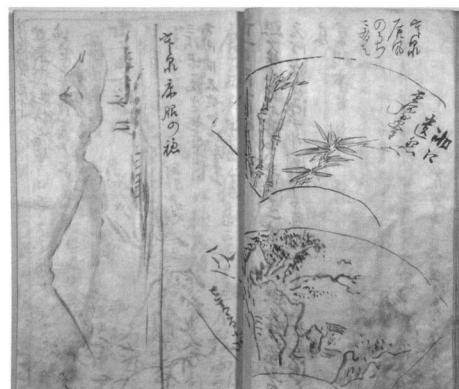
29才30才



32ウ33オ



31ウ32オ



34ウ35オ



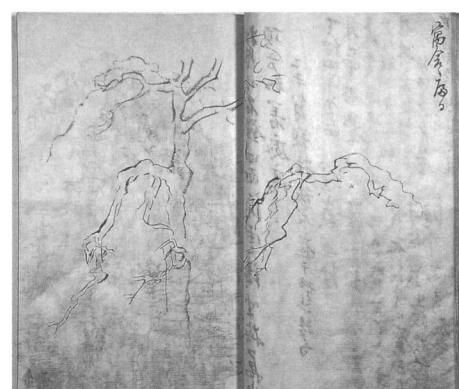
33ウ34オ



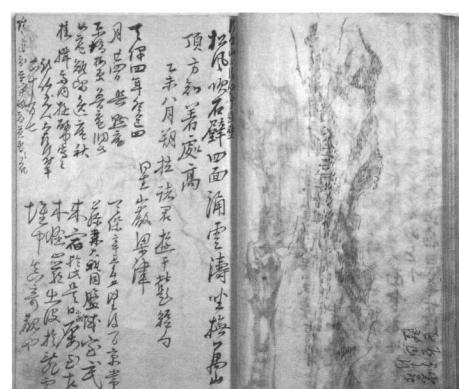
36ウ37オ



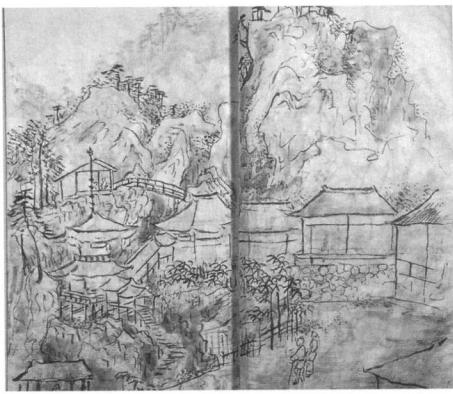
35ウ36オ



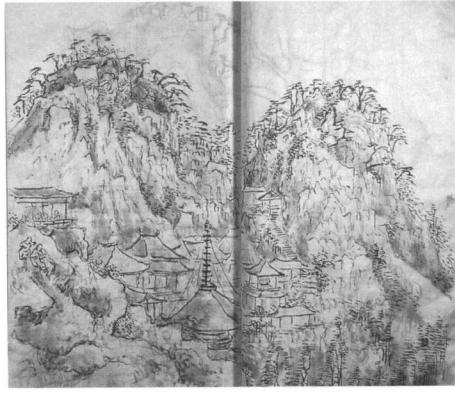
38ウ39オ



37ウ38オ



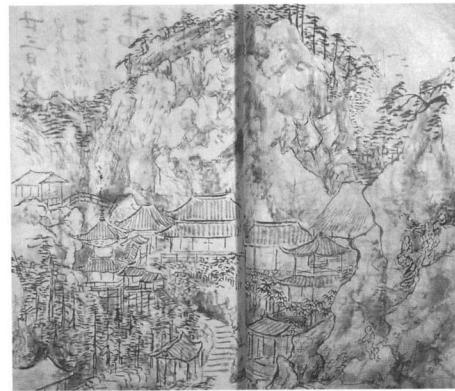
40匁41才



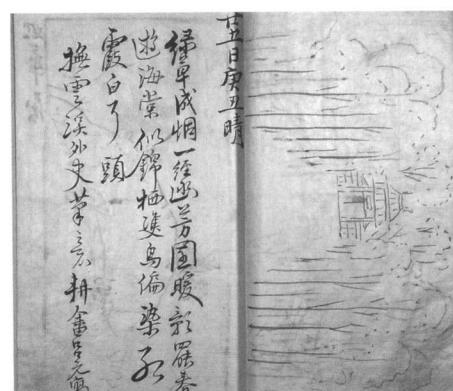
39匁40才



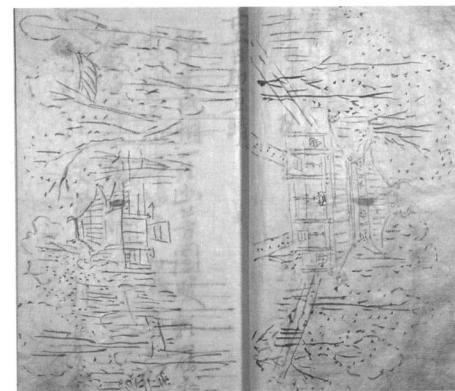
42匁43才



41匁42才



44匁45才



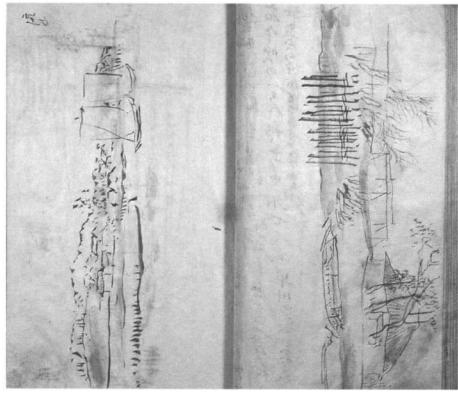
43匁44才



46匁47才



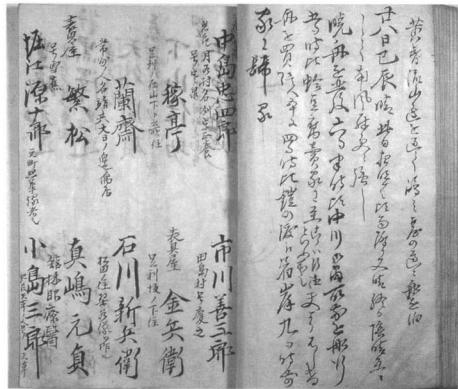
45匁46才



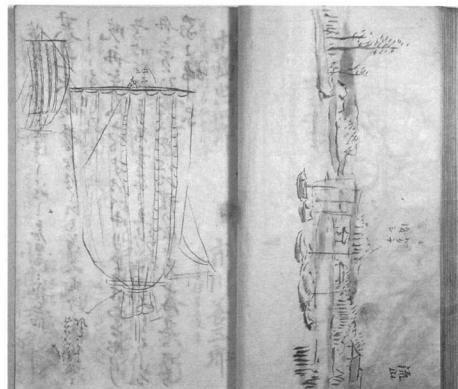
48匁49才



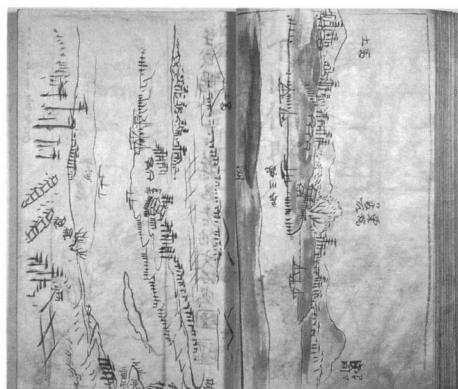
47匁48才



50匁51才



49匁50才



52匁53才



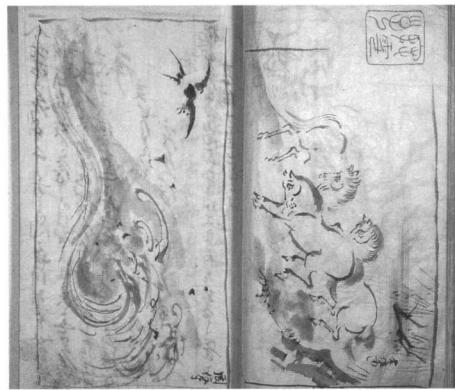
51匁52才



54匁55才



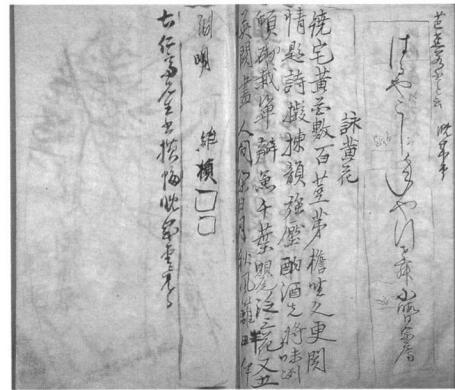
53匁54才



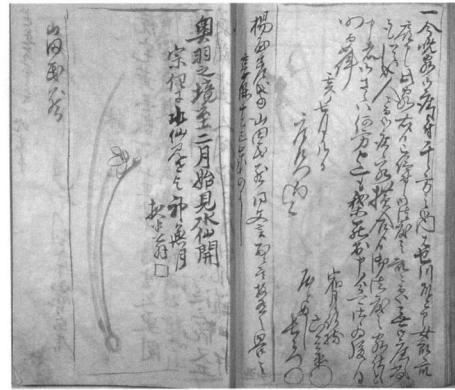
56ウ57才



55ウ56才



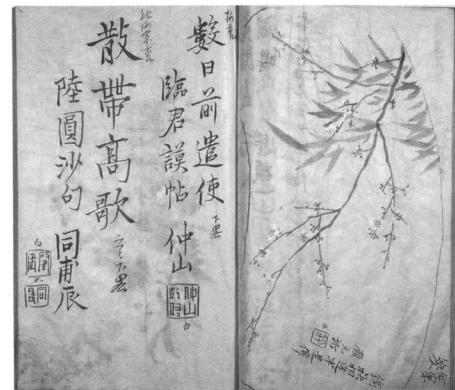
58ウ59才



57ウ58才



60ウ61才



59ウ60才



62ウ63才



61ウ62才

夫顯揚正教仲山彭翊

學道之全體
蟬閨寵惺
葛齋野禪
漫庵南歸
古翁寒禡
身在江湖
身在九國
福祿正位
身在萬物
身在萬士



63匁64才



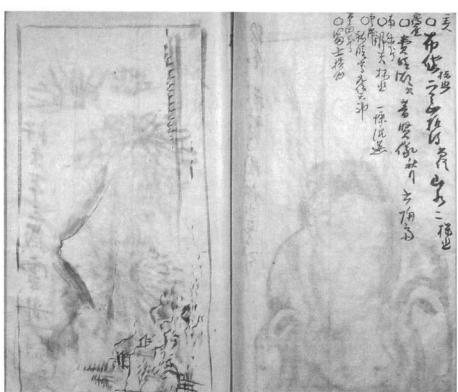
64匁65才



66匁67才



65匁66才



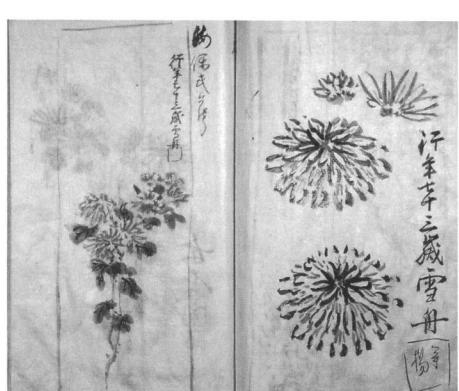
68匁69才



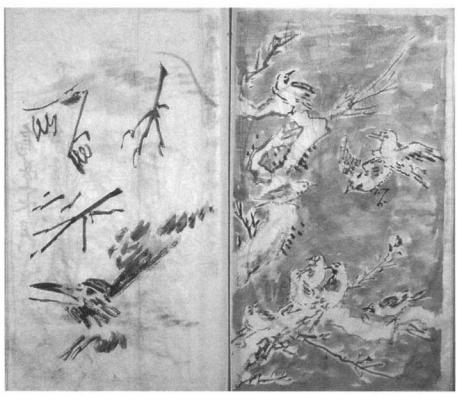
67匁68才



70匁71才



69匁70才



72ウ73才



71ウ72才



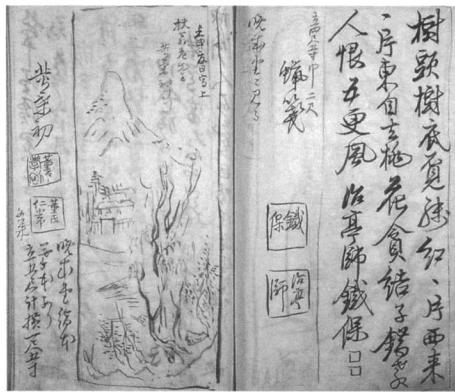
74ウ75才



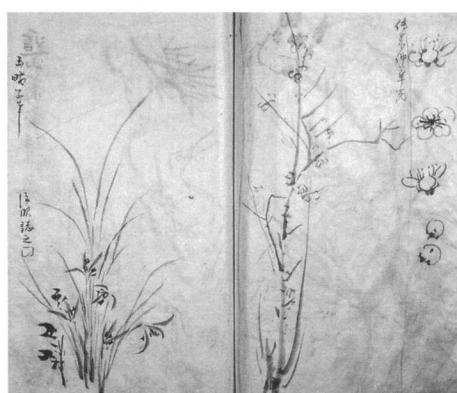
73ウ74才



76ウ77才



75ウ76才



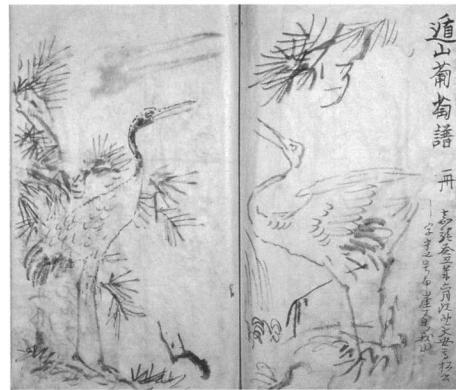
78ウ79才



77ウ78才



80ウ81才



79ウ80才



82ウ83才



81ウ82才



84ウ85才



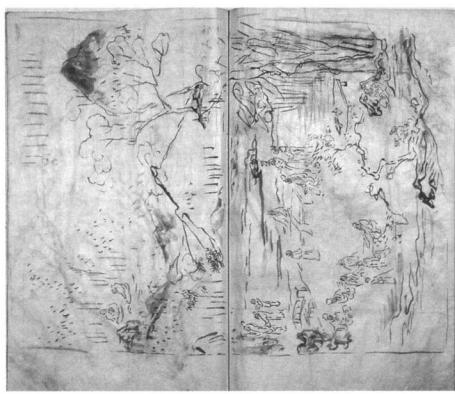
83ウ84才



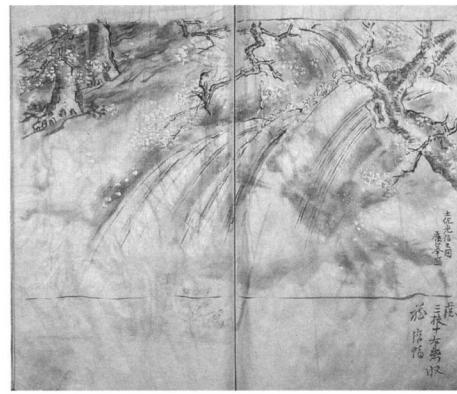
86ウ87才



85ウ86才



88ウ89才



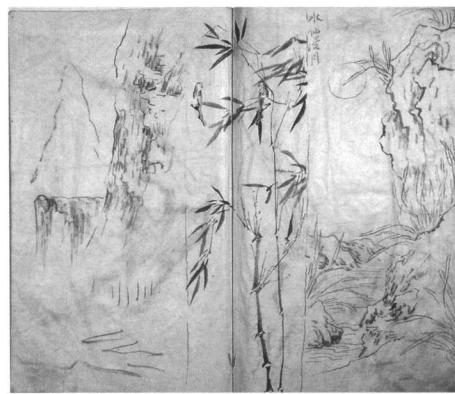
87ウ88才



90ウ91才



89ウ90才



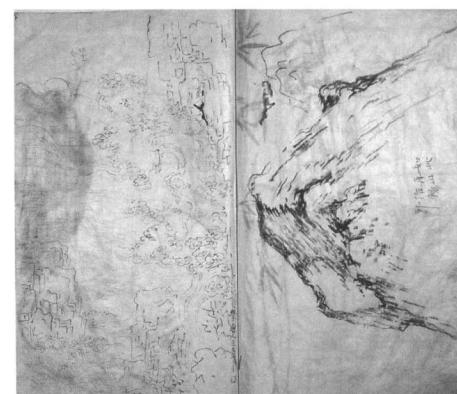
92ウ93才



91ウ92才



94ウ95才



93ウ94才